HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	フリードリヒ・シラー『ドン・カルロス　スペインの皇太子　演劇的詩』　一八〇五年最終版　第一幕
著者	北原, 寛子; KITAHARA, Hiroko
引用	北海学園大学学園論集(175): (7)-(37)
発行日	2018-03-25

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

フリードリヒ・シラー
『ドン・カルロス　スペインの皇太子　演劇的詩』
一八〇五年最終版　第一幕

北原寛子訳

登場人物

フィリップ二世　スペイン王
エリザベート・フォン・ヴァロワ　その妻
ドン・カルロス　皇太子
アレクサンダー・フェルネーゼ　パルマ王子、王の甥
クララ・オイゲーニア内親王　三歳の幼児
オリヴァレス公爵夫人　宮廷女官長
モンデカー侯爵夫人
エボリ公女
フエンテス伯爵夫人　王妃の侍女

ポーザ侯爵（マルキ・フォン・ポーザ）　マルタ騎士
アルバ公爵
レルマ伯爵　護衛長官
フェリア公爵　羊毛騎士
メディア・シドニア公爵　海軍提督
ドン・ライモンド・フォン・タクシス　郵便長官
ドミンゴ　王の聴罪司祭
王国の異端大審問官
カルトゥジオ会修道院長
王妃の小姓
ドン・ルードヴィヒ・メルカード　王妃の侍医
侍女たち、高官たち、小姓たち、将校たち、
護衛などさまざまなセリフのない登場人物

スペインの重臣たち

第一幕

アランフェスの王の庭園

第一場

カルロス　ドミンゴ様。

ドミンゴ　アランフェスの美しい日々が
終わろうとしています。殿下におかれましては
より朗らかに過ごされますように。私たちは
いたずらにここにおりました。どうかこの
謎に満ちた沈黙をお破りください。あなたの心を
この父の胸にお打ち明け下さい、皇子様。高すぎることは、
王様はご子息の静けさを――
唯一のご子息であられますが――買って高すぎるということはありません。

［カルロスは地面を見つめ黙っている。］

天が、息子たちの中でも一番のお気に入りには拒んでいるような
願望が、まだ隠されているのでしょうか。
私は、トレドの城壁の中で
誇り高きカール様が表敬訪問を受け、
王侯たちがその手に口付けしていた時に、立ち会っておりました。
そして今――敗北を期し、
六つの王国がその足元に横たわっているこの時に――
私は立ち合い、見たのです、若く誇り高い血が
その頬に上昇し、胸が
王侯らしい決然とした意志によって膨らんだのを。見たのです、
その陶然とした瞳が、集まりの間を抜けて飛び立ち、
喜びであふれる様を――皇子様、そしてその目は
語っておりました、私は満ち足りている、と。

［カルロスはそっぽを向く。］この静かで、
厳かな苦悩を、皇子様、私どもは
八か月すでにそのまなざしから読み取っておりましたが、
この宮廷全体の謎であり、
王国の不安でありますが、陛下におかれましても、
すでにいく晩もの悩みの種となり、
あなたのお母様の涙を誘ってまいりました。

カルロス　［さっと振り向いて］　お母様！
――ああ天よ、何とか忘れさせてくれ、
あの人が彼女を私の母にしたことを！

ドミンゴ　皇子様！

カルロス　［物思いにふけり、手で額をさっとぬぐいながら］
神父様――私はとても不幸な思いをしています、
私の母たちについては。私がこの世に生を受けて
最初に行ったことは、

母親殺しでした。

ドミンゴ　ありえましょうか、皇子様？
この非難があなたの良心を押しつぶしてしまうことなど。

カルロス　そして私の新しいお母様は――あの方は私から
父上の愛情を奪ったのではありませんか？
父上は私をほとんど愛して下さらない。
私の役割は、唯一の後継者ということだけだった。
あの方は父上に娘をお授けになった。――ああ、誰がわかるのだ、
こんな背景が今さら隠れているということを？

ドミンゴ　あなた様は私をからかっておられます、皇子様。
スペイン中が王妃様を敬っております。あなた様は
ただ憎しみをこめた眼差しで、
　あの方をご覧にならなければならないのでしょうか。
王妃様のお姿を見るにつけ、賢明さが聞こえませんでしょうか。
どうしてでしょう、皇子様？　この世で一番美しい女性で、
そして王妃様であられ――かつてはあなた様の許嫁であったあの
方が？
ありえません、皇子様！　信じられません！　決して！
すべてが愛を注いでいるときに、カール様だけが憎むことなどで
きません。
そんな道理に合わないことをカール様がおっしゃるものではござ
いません。
ご用心ください、皇子様、あの方が、
ご子息に全然気にいられていないということを、
お耳にいれませんように。
この知らせにはお悲しみになることでしょうから。

カルロス　そう思うか？

ドミンゴ　殿下はこの間の
サラゴサ[1]での馬上試合をまだ覚えていらっしゃいますか、
陛下に槍の先がかすった時でございます――
王妃様は侍女の方々と宮殿の桟敷の真ん中にお座りでした。
そして試合を伺っておられました。突然叫び声がしました、
「王様が血を流された！」――みながてんでに駆け出し、
鈍いざわめきが王妃様の
耳にとびこんできました。「皇子様？」とお叫びになり、
一番上の柵から
大急ぎで降りようとなさりました。――「いいえ、王様でございま
す！」
答えが返ってまいりました――「では侍医たちを呼びにやりなさ
い！」
と、息をつきながらお応えになったのです。
［やや沈黙した後に］
考えごとをしておられますか？

カルロス　びっくりするな、
王様の陽気な聴罪司祭様が、そんなに
愉快な出来事にお詳しいとは。

---

[1] スペイン北東部の都市。

［真剣に、陰鬱に］
でもいつも聞いてきたよ、
行動を監視したり、噂を立てたりする人は
もっと悪いことをこの世でしでかしたのだと。
毒や槍が、殺人者の手に入らなかった時もね。
その苦労には、司祭様、及びませんでした。もし
感謝されたいのならば、王様のところに行ってください。

ドミンゴ　皇子様は大変お上手に、用心してらっしゃいますな、
人間というものに――しっかり区別なさっています。
偽善者を友と取り違えることがありません。
私はいい意味で申し上げているのですよ。

カルロス　どうぞこのことを
父上には悟らせないでください。さもないと
あなたの緋色の衣装[2]に係わりますよ。

ドミンゴ　［面喰って］　なんですって？

カルロス　そういうことです。
父上があなたにスペインで最初に
その緋色の衣装を授けると約束したのでしたね？

ドミンゴ　皇子様、
私をからかいますな。

カルロス　神様、お守りください、
私が、父上に祝福を与えたり、
罰を与えたりすることのできるほど
恐れ多い方をあざけったりしませんように。

ドミンゴ　私はあえて
皇子様、あなた様の苦悩の
尊い秘密に踏み込もうなどとはいたしません。
ただお願いですから、殿下、
心にとめておいてくださいまし、
良心が不安に駆られる時は
教会が避難所となることを、
そのために王国には鍵がかかっておらず、
罪深い行いでさえ、告解の秘密の
刻印の元に帳消しにされるのです。
私の言っていることをおわかりですね、皇子様、私は
きちんと申し上げました。

カルロス　いいえ、僕とは無縁であるべきだ、
刻印の導き手をそんな風に試すことは！

ドミンゴ　皇子様、この不信とは――あなたは最も忠実な
下僕を見損なっていらっしゃる。

カルロス　［彼の手を握りながら］
それでは僕を
どうか放っておいておくれ。あなたは聖職者だ、
それは世間も知っている――でもはっきり言って――僕にとって

[2] 「緋色の衣装」とは、枢機卿（ローマカトリック教皇の最高顧問）が身につける衣装を指す。ここでは、これによってその地位を暗示している

あなたは十分に尽くしてくれている。あなたの道は、
司祭様、とても広くて、
聖ペトロの御座まで続いている。
たくさん知りすぎたことがあなたの重荷になっているのだろう、
あなたをここに寄越した王様のところへ報告しなさい。

ドミンゴ　私を寄越したとは――

カルロス　そう言ったよ。あぁ、はっきりと、
はっきりとわかっているのだ、僕がこの宮廷で
裏切られていることを――わかっているよ、何百という目が
僕を見張ろうと、こちらに向いているって、わかっているのだ、
フィリップ王が唯一の息子を
下僕にひどい値で売り渡したことを、
そしてみんなが僕の言ったこと一語一句で
密告者にたっぷりと支払ってやってることを、
あの人は善行には報いなかったのにね。
わかっているのだ――あぁ、黙れ！　このことはもうよそう。
僕の心はあふれかえってきた、僕はもう
たくさん話しすぎた。

ドミンゴ　王様は
晩になる前にマドリードにお着きになるおつもりでした。
すでに宮廷に人が集まっているでしょう。私は
お暇（いとま）いたします、皇子様――

カルロス　行っていいよ。僕も後から行くから。

［ドミンゴ退場する。沈黙の後。］

嘆かわしきフィリップよ、どんなにか息子が
嘆かわしいか！――もう僕には、その魂が
猜疑心の毒に満ちた蛇に噛まれて血を垂らしているのが見えているよ、
惨めな好奇心が慌てふためいて
見つけものの中で一番恐ろしいことに飛びかかるんだ、
そして自分でそれを作っておいて、怒り出すんだ。

第二場

カルロス。マルキ・フォン・ポーザ。

カルロス　誰が来た？――僕が見ているのは！　あぁ、かのよき魂
の主だ！　僕のローデリヒ[3]！

マルキ　我がカルロス様！

カルロス　ありえるだろうか？
本当だろうか？　現実だろうか？　君なのか？――あぁ、君だ！
僕の胸に君を抱きしめよう、そして

[3] マルキ・フォン・ポーザの名前はロドリーゴ Rodrigo であるが、ここではドイツ風にローデリヒ Roderich と記されているのでそのままにした。

君の胸が僕のそばでしっかりと鼓動するのを感じるんだ。
あぁ、今はまた全部よくなったぞ。こうして
抱きしめあっていると、僕の病んだ心が癒される。僕は
ローデリヒにすがっているんだ。

マルキ　　あなたの病んだ、
あなたの病んだ心ですって？　何がよくなったのですか？
再びよくならなくてはならないものとは何のですか？
ご覧のとおり、私は驚いています。

カルロス　　そして何が
君をこんなにも思いかけずにブリュッセルから連れ戻したんだい？
この驚きのお礼は誰に言えばいいのかな？　誰に？
まだ聞いてもいいかな？　喜びに酔った者に、
意図は崇高なのだから、こんな無礼を許してくれ。
あなた以外の誰にお礼を言えばいいのでしょう、大慈の神よ？
あなたは、カルロスには天使がいなかったことを
わかっておられた。私に送ってくれたのですね、
この人を。まだ聞いてもいいかい？

マルキ　　申し訳ありません、
親愛なる皇子様、この溢れかえる
喜びにうろたえて応えるばかりです。
私がドン・フィリップ様のご子息に期待していたことは
こんな感じではありませんでした。不自然に赤く
あなたの蒼白い頬が燃え上がっています、
そしてあなたの唇は熱を帯びて震えています。
私は何を信じるべきでしょうか、親愛なる皇子様？――
これは、抑圧されている英雄的な民衆[4]が私を送り出した
ライオンのように豪胆な若者ではありません。――
というのも私は今ローデリヒとしてここにいるのではございません、
カルロス様の遊び相手の少年としてではないのです――
人間性全体を全権委任された者として
私はあなたを抱擁します――フランドルの
諸州なのです、あなたの首にすがって泣いているのは、
そして厳かに、救いを求めてあなたに追いすがるのは。
なされていることは、あなたの尊いお国に係わることなのです。
アルバが
首切り人の野蛮な従僕と化して
ブリュッセルにスペインの法律を押し付けたのです。
カール大帝の栄光に満ちた子孫には
これらの高貴なる諸州の最後の望みがかかっております。
望みは砕けてしまうのです、その崇高なるお心が
人間らしさのために鼓動していることをお忘れになられたならば。

カルロス　望みは砕けているよ。

[4]「抑圧されている英雄的な民衆」とは、反乱を起こしているオランダの人々を指す。

マルキ　あぁ、なんということだ！　こんなことを耳にするとは！

カルロス　君は過ぎ去った時代のことを話しているのだね。
僕もかつてカール[5]のことを夢に見たよ、
その頬は燃えるようになるんだ、もしみんなが
自由について語った時には――
でもそいつは長いこと葬られてしまっているよ。
君が今見ているのは、もうその時のカールじゃないよ。
アンカラで君と別れた時のね。
不遜にも甘い夢見心地で、
新しい黄金の時代の担い手に
スペインでなろうとしたんだ――あぁ、この考えは
子どもじみている、でも神々しく美しい。過ぎたことだ
こんな夢は――

マルキ　夢ですと、皇子様！――では、
ただの夢だったのでしょうか？

カルロス　泣かせておくれ、
君の胸で、熱い涙を流させてくれ、
ただ一人の友よ。僕には誰もいないんだ――誰も――
この広々とした大地に誰もいないんだ。
父上の王笏が及ぶ限り
行く船が我々の国旗を翻して進む限り、
どこにもないんだ、どこにも――どこにもないんだ、
僕が泣かないでいられるところなんて、
ここのほかには。あぁ、すべてにかけて、ローデリヒ、
君と僕が大胆にも天国で望んでいることも、
僕をこの場所から引き離すことはないよ。

マルキ　［彼に身を寄せて、無言で同情して］

カルロス　僕が孤児だったとらしたらって、想像してみてくれ、
君は、玉座のそばでその子を見つけて、哀れに思って拾うんだ。
父親が何という名かも知らない――でも僕は
王の息子なんだ――あぁ、もし
僕の心が言う通りだとしたら、もし君が百万人の中から
僕のことをわかってくれるために見つけ出された人だとしたら、
もし万物を創造する自然が
ローデリヒをカルロスの中にもう一人創り出して、
僕らの魂の繊細な弦を
人生の明け方に同時に奏でることが本当にできるとしたら、
もし僕の心を和らげる涙が、
君にとって僕の父上の慈悲よりも大切なものだとしたら――

マルキ　全世界よりも大切です。

カルロス　僕はこんなにも深く
落ちてしまい――こんなにも哀れになってしまったので
僕らの小さな子供だった頃を

---

[5] ここでカルロスは自分のことをドイツ風にカール Karl と呼んでいる。名前の表記は、先ほどのマルキ・フォン・ポーザと同様に、ドイツ風とスペイン風が混在している。

忘れないでくれと無理矢理お願いしなくてはならないよ――
君にお願いしなくては、
君が船乗りの格好をしているときに作ってしまった
長い間忘れていた借金を払ってくれって――
二人のやんちゃ坊主だった君と僕は
兄弟のように一緒に育ったが、
君の心がとてつもなく暗く僕を眺めても
痛みを感じなくなった時に――とうとう
大胆な決心をしたんだ、限りなく君を愛そうって、
だって君と似た者でいる勇気を失ったから。
そこから僕は幾千もの思いやりと
親愛なる兄弟の情でもって、君を苦しめ始めた。
誇り高き心をもつ君は、僕につれなく返したね。
僕はよくそばにいたけれど――でもそれは君の目に全然入らなかった！
そして熱くあふれる涙の粒が
僕の目にあふれたのだ、君が僕を無視して
卑しい子どもたちを抱擁したときに。
どうしてこの人たちだけなのだ？　僕は何千回も叫んだよ、
僕だって君にはとってもよくしているんじゃないか？――でも君は
僕の前に冷たくまじめくさって跪（ひざまず）くだけだった。
君は言ったよ、これが王の子息にはふさわしいんだって。

マルキ　あぁ、お静かに、皇子様、こんな子ども時代の思い出をお話になるなんて、私をすっかり赤面させます。

カルロス　これは君だけのせいじゃないよ。恥じ入らせ、
粉々にできたんだよ、君は僕の心をね。でも決して
君から離れられなかった。君は三度
王にお願いしたね、あの人は三回とも来たよ、
君を愛するように、
君を力づくで愛せとね。
カルロスが全然できなかったことを、偶然がやってのけたのさ。
一度は僕らが遊んでいる時に起こったんだ。
僕の小母上にあたるベーメン王妃の目に
君の打った羽付きボールが当たった時だよ。小母上は
わざとだと思い、泣きながら
王様に訴え出たんだ。
宮廷中の少年が
王様に弁解するために出頭しなくちゃいけなかった。
王様は誓われたのだ、悪い行いには、
万が一、自分の子どものせいだとしても
こっぴどく罰を与えようと。――その時僕は
君が遠くのほうに震えながら立っているのが見えた、そして
そして僕が進み出て、王様の
足元に身を投げた。僕です、僕がやりました、と声を上げた。
あなたの息子に、お言いつけ通りなさってください。

マルキ　あぁ！　何を思い出させるのですか、皇子様！

カルロス　小母様ったら、

困り果てて同情している
宮廷中を前にして、
奴隷に対するやり方で、君のカールに思いを遂げたね。
僕は君を見つめて、泣かなかった。痛みで
歯ぎしりしたけれど、
僕は泣かなかった。僕の王家の血が
不名誉にも理不尽な打擲（ちょうちゃく）で流れた。
僕は君を見つめて、泣かなかった――君は駆け寄り、
大声で泣きながら僕の足元に身を投げたんだった。そうだ！
そう、君は声を上げた。僕の誇りは打ち負かされた、
君が王様になったらそれを払うよって。

マルキ　［彼に手を差し伸べて］
私もそうしましょう、カール様。子どもの頃の誓いを
大人になって新たにしましょう。私は務めを果たします。
そろそろ私がそうする頃です。

カルロス　　今だよ、今だ。
あぁ、ためらうんじゃない。今その時になったんだ。
君が借りを返せる時が来た。
僕には愛が必要だ。――恐ろしい
秘密が僕の胸で燃えている。それを
それを明かそう。君の蒼白い表情に
僕は死刑宣告を読み取ることだろう。
よく聞いて――じっとして――でも答えないで――
僕は母上を愛している。

マルキ　　あぁ、なんということ！
カルロス　違うんだ、こんな手加減はして欲しくないな。何か言ってくれ、
話してくれ、この丸い地球の上で
僕ほど哀れなものはないない――話してくれ――
何か言えることを、もう僕は言ったよ。
息子が母親を愛してしまったんだ。この世の習わしや
自然の秩序、ローマ法も
この情熱は間違いだと咎め立てする。僕の求めていることは
怖いほど父上の権利に抵触する。
僕は分かってはいるのだけれど、でも愛しているんだ。この道は
狂気や死刑台に向かっている。
僕は希望なく愛している――罪を背負って――
死の不安と命の危険を感じながら――
そんな見込みしかないが、でも愛しているんだ。

マルキ　　王妃様は
この思いをご存じなのですか。

カルロス　　僕があのお方に
悟らせることができるか？　彼女はフィリップ様の奥方だぞ、
王妃様だ、そしてここはスペインの領土。
父上の嫉妬が見張っていて、
宮廷の作法に取り囲まれ、
どうやって付き添い人を連れずにあの方に近づけるというのか？
不安に満ちた八か月が過ぎたよ、

僕を王様が大学から
呼び戻してから、僕があのお方を毎日眺め
判決を言い渡され、墓のように黙るようになってから。
すっかり八か月だよ、ローデリヒ、
この炎が僕の胸に燃え上り、
何千回もこの途方もない
告白が僕の唇に上ってきたけれど、
でもびくびくと怯えて心の中に這うように戻っていくんだ。
あぁ、ローデリヒただちょっとでいいから
あの方と二人きりで――

マルキ　あぁ！　あなたのお父様が、皇子様――

カルロス　不幸な人だ！　なぜあの人のことを思い出させるのだ？
どうか良心がいろいろとがめると、僕に言わないでくれ、
父上のことは話さないでくれ。

マルキ　父上様を憎んでおられますか？

カルロス　いいや、あぁ、それはない！
父上が憎いのではない。――しかし見物人や
いたずら者たちという憂慮が僕に襲ってくるのだ、
この恐れ多い名前の下（もと）にね。
奴隷のような教育が
すでに僕の若い心の中で
愛のやわらかな芽を踏みつぶしてしまったことに、僕が同意できると？
六歳の時だった、
僕の前に初めて
あの恐ろしいお方が、つまり彼らが僕に言ったところの、
僕のお父様が、現れたのは。そして
あの朝、父上は即座に
死刑判決四件に署名なさった。その後に
私はあの方をただ見つめたのだ、私の行為に
判決が下される時のように。――あぁ、神よ！
僕はつらくなると今でも感じるんだ――逃げたい、
逃げたい、こんなところから。

マルキ　いいえ、あなたは
今こそ心を開かれるべきです、皇子様。言葉で
重い荷を負った胸の内を軽くなさい。

カルロス　一人でするとよく上手くいくんだ、よく
真夜中に、護衛の者たちが寝ている時に、
熱い涙を流しながら、聖母マリア様の
絵の前に身を投げて、
聖母様に子供らしい心を下さいとお願いするんだ――でも
願いがかなって立ち上がることはない。あぁ、ローデリヒ！
慎重に、この不思議な謎を解いてくれないか、
――どうして幾千もの父親のうち、
よりによってあの方が僕のところに？　そしてあの方に
よりによってこの息子が、
幾千ものもっとよい息子たちの中からあてがわれたのだ？
耐え難く対立する二つのものを

自然はその圏内にあわせもつことはないのに。
どうして自然は、人間性の
両極端――僕とあの人――を
神聖なる絆によって結びつけることを強いようとしたのだろう？
恐ろしい運命！　どうしてそうならざるをえないのか？
どうして、永遠に避けあいたい二人の人間が、
たった一つの望みにおいては忌まわしくも出くわしてしまうのか？
そうなんだ、ローデリヒ、君には二人のいがみ合う
顔が、果てしなく過ぎていく時間の中で
一度だけ正反対の軌道で
打ち砕けんばかりに激突するのが見えるだろう、そしてずっと
永遠に離れて飛んで行くんだ。

マルキ　私には
不幸な瞬間に思えます。

カルロス　僕にもだよ。
深淵にいる復讐の女神フリアのごとく、僕を
恐ろしい夢が追いかけてくる。ためらいながら
僕の善良な精神は、おぞましいイメージと戦っているんだ。
迷宮のように惑わせる詭弁によって
僕の精神の鋭さは運悪くのろのろとしか進めず、そしてとうとう
不意に現れた深淵のふちで立ちすくむ――
あぁ、ローデリヒ、父上を
忘れてしまえたら――ローデリヒ、君の
死人のように冷たい視線は、僕を理解してくれたということだね。
もし僕が父上を忘れてしまえるとしたら、
僕にとって王とは何になるのだろうか？

マルキ　［しばらく沈黙したのち］
カルロス様、
お願いしてよろしいでしょうか？
あなたのご意志にかかわることだとしても、お約束ください、
友達抜きには何も行わないと。

カルロス　私にお約束していただけますか？
全部、全部そうしよう、
君の愛が僕に願うことなら。僕は
すべてを君の腕の中に投げうつよ。

マルキ　うわさでは、
王様は町に戻ろうとしているとのことです。
時間はありません。もしあなたが王妃様と
密かにお話ししたいとお望みなら、それは
アランフェスをおいてほかにはないでしょう。かの地の
静けさは――国の習慣を無理強いしないことでは
好都合でしょう――

カルロス　それは僕にも望ましい。
でもあぁ、この望みは無駄だろう。

マルキ　そうとも限りませんよ。
私は、あの方にすぐさまご挨拶に参りましょう。
もしあの方が、お変わりなく

以前ハインリヒ王[6]の宮廷にいらしたときのようでしたら、
きっとすぐに心を開いてくださるでしょう。私は
その瞳にカルロス様のお望みを読み取り、
この話し合いに
ご同意いただけましょう――侍女たちは処払いされることでしょう――

カルロス　ほとんど要件が片付いたようなものだな。――特に
モンデカー夫人は、息子が以前
僕の小姓として勤めていたが、僕のためになってくれるはず――

マルキ　ますますよろしい。
ではお近くにいてください、皇子様、すぐさま
私が合図をしたら出てきてください。

カルロス　そうしよう――そうしよう――では急ごう。

マルキ　一刻も無駄にしたくはありません。
ではあちらで、皇子様、さようなら。

［二人は別々の方向に退場する。］

アランフェスの王妃の宮廷

簡素な田舎の地域、並木道が横切り、王妃の田舎の屋敷によって区切られている。

第三場

王妃。オリヴァレス公爵夫人。エボリ公女。モンデカー侯爵夫人。
彼女たちは散歩道からやってくる。

王妃　［侯爵夫人に］
あの子をそばに連れてきてください、モンデカー。
王女の陽気なまなざしが
朝のあいだずっと私を苦しめています。ご覧なさい、
あの子は喜びを隠しきれずにいます、
だって田舎にさようならを言っているのですから。

エボリ　私は
否定は致しません、王妃様、
マドリードをまた目にできるのは、とてもうれしいです。

モンデカー　陛下もそうではございませんか。あなた様は
アランフェスから離れるのがそんなにお嫌ですか。

王妃　この美しい地域からは――少なくとも離れたくありません。
ここで私は自分の世界にいられるのです。この小さな場所を
長い間お気に入りにしてきました。
ここで私は田舎の自然という

6　「ハインリヒ王」は、アンリ王のドイツ語風の読み方である。フランスのアンリ二世（一五一八―一五五九）、エリザベス王妃の父親を指す。

若き日の心の友にあいさつを送っていました。
ここにいると、子供時代の遊びをまたしているようだし、
我がフランスの空気がここにはそよいでいます。
悪く取らないでちょうだいね、私たちはみな
祖国に心惹かれるもの。

エボリ　しかしここは
なんと孤独で、なんと死のようで、悲しいのでしょうか。まるで
ラ・トラッペの修道院[7]にいるかのようです。

王妃　真逆ですよ。
死のようと言えば、ただマドリードにしか当てはまりません。――
でもわれらが公爵夫人はどういうご意見かしら。

オリヴァレス　わたくしの
考えでは、陛下、
ひと月はこちら、
もうひと月をパルド[8]に滞在し、
冬を王宮におりますことが、
スペインに王様があるかぎりの習慣だということでございます。

王妃　そうね、公爵夫人、お分かりのように、あなたとは
いつも言い争いになるのよね。

モンデカー　そして今度のマドリード滞在は
活気に満ちたものになりましょう。闘牛が
すでにマジョール広場で準備されていますし、
異端者の公開火あぶりオトダフェも
きっとあるということです。

王妃　きっとあるですって！　そんなことを
私の心優しいモンデカーの口から聞かされるなんて。

モンデカー　どうしてだめなのですか。
火あぶりにされるのは異端者なんですよ。

王妃　エボリさんが違う考えだといいのでけれど。

エボリ　私ですか？――陛下、お願いですから、
モンデカー侯爵夫人よりも
私を悪いキリスト教徒だとは思わないでくださいまし。

王妃　あぁ、私ったら
どこにいるのか忘れていたわ。――何か他の話に――
田舎の話をしてたんだわ。今月は
驚くほど早く過ぎたように思えるわ。
今回の滞在に、たくさん、とてもたくさんの楽しみを
期待していたのだけれど、望んだようにはいかなかったわ。
どんな希望もそんなものなのかしら。私は
叶えることのできない望みを、抱くことはできないわ。

オリヴァレス　エボリ公女さん、あなたはまだ私たちに
ゴメス様[9]が希望をつないでいいのかどうか、言っていませんでし

7　フランス・ノルマンディー地方にあるシトー会の修道院。厳格な沈黙の掟で知られる。

8　マドリード北部の狩猟用の館。

9　エボリ公女の歴史上の伴侶であるが、ここでは求婚者ということになっている。

たね。
私たちは間もなく、花嫁になったあなたにご挨拶できるのかどうかを。

王妃　そうよ！　思い出させてくれたわ、公爵夫人。
［公女に］
人からあなたにとりなすように頼まれているの。
でもどうやってすればいいのかしら。私のエボリさんにふさわしい男性は、
品位がなくてはいけません。

オリヴァレス　陛下、
まさにそのような方ですわ。とても気品のある方です。
われらが慈悲深き王様が、周知のごとく
目をおかけになっている男性です。

王妃　ではその男性は、とても幸せになることでしょう。――でも私たちが知りたいのは、その男性が愛することができるか、そして愛に報いることができるかどうかということです。
――エボリさん、あなたにお尋ねしましょう。

エボリ　［黙ったまま立ちすくみ、困惑している、目を伏せ、とうとう王妃の足元に崩れ落ちる］
寛大なる王妃様、
私をお憐れみ下さいまし。私を――
どうぞお願いですから、私を見放さないでください――
私を犠牲にしないでください。

王妃　犠牲にするですって？
もうこりごりだわ。お立ちなさい。
犠牲になるのは、つらい運命なのです。
あなたの言うことを信じましょう。お立ちなさい。
伯爵にお断りしてから、ずいぶん経つのですか。

エボリ　［立ち上がりながら］　もう何か月にもなります。
カルロス皇子様がまだ大学にいらした頃です。

王妃　［バランスを崩し、彼女を確かめるような目でみつめる］
あなたは
どういう理由か、よくよく考えてみましたか。

エボリ　［勢い込んで］　こんなことは
決してありえません、王妃様。
幾千もの理由から、ありえないのです。

王妃　［非常にまじめに］　複数あれば
多すぎるというもの。あなたはその方を評価できないのですね
――それで私には十分です。それ以上は聞かなくてもいいでしょう。
［ほかの女性たちに］　私は
今日はまだ内親王に会っていません。
侯爵夫人、ここに連れてきて。

オリヴァレス　［時計を見て］　まだ
時間になっておりません、陛下。

王妃　まだ私が母でいてよい時間になってないとでも。
それはあんまりです。お忘れにならないでね、
内親王が来た時には、私に知らせて。

［小姓が登場し、侍女長官に小声で話しかける。侍女長官はその後
王妃に向き変える。］

オリヴァレス　フォン・ポーザ
侯爵です、陛下。

王妃　フォン・ポーザ？

オリヴァレス　彼はフランスとオランダからやって来て、
王妃様のお母様からのお手紙を
お渡しする
お許しを願っています。

王妃　それは許されているの？

オリヴァレス　［考え込んで］　私への指示では
特別な場合が考慮されておりません。
この、カスティーリャ国の最高位グランデの地位にある者が
外国の宮廷からスペインの王妃様に
庭の片隅で
手紙を渡しに来るというような場合は。

王妃　それでは
自己責任で行いましょう！

オリヴァレス　では王妃様には
しばらく席を外すことをお許しいただきますように。

王妃　お好きなように
なさればいいわ、公爵夫人。

［侍女長官は退場し、王妃は小姓に合図をする。小姓はすぐにやって来る。］

第四場

王妃。エボリ公女。モンデカー侯爵夫人。フォン・ポーザ侯爵（マルキ）。

王妃　私はあなたを
歓迎いたしましょう、騎士様。スペインへようこそ。

マルキ　このスペインを、
今ほど誇り高く我が祖国と呼んだことはございません。――

王妃　［両方の侍女に向かって］　フォン・ポーザ侯爵は
ランス[10]での馬上試合の折
私の父の槍を砕き
私の色を三度勝利させたのですよ。私に、
スペインの王妃であることの名声を感じることを教えてくれた
最初の国民なのです。
［侯爵に向き直り］
私たちがルーヴル宮で
最後にお会いした時、騎士様、
きっと夢にもお考えになりませんでしたね、
カスティーリエン国で私の客人になろうとは。

10　フランス北部の都市。

マルキ　思いませんでした、王妃様。――というのも当時私は、
フランス国が、私たちが嫉妬していた唯一のものを、
私たちに分け与えてくれるとは、夢にも思っていませんでしたから。

王妃　誇り高きスペイン人よ！
唯一のもの？――そしてそれはヴァロワ家の
娘の一人と？

マルキ　今は
そう申しても許されましょう、陛下。なぜならば、今や
あなた様は私たちのものですから。

王妃　あなたの旅路は、聞くところによりますと、
フランスも通ってこられたということで。――何を
尊敬すべきお母様や、たくさんの愛しい兄弟たちから
私に持ってきてくれましたか。

マルキ　［彼女に手紙をいくつか手渡す］
お母様、つまり王妃様[11]は、ご病気とお見受けいたしました。
この世の多くの喜びから遠ざかっておられましたが、
ただ娘様が幸せに
スペインの王位にあると知ることだけを喜んでおられました。

王妃　お母さまが
こんなにも親しみを感じている身内のことを思っているのだから
そうでないことがありましょうか？　それにしても
お懐かしい――あなたはたくさんの宮廷を
旅の途中でお訪ねになったのよね、騎士様。
そしてたくさんの国々、たくさんの人々の習慣を
ご覧になったのでしょう。――そして今は
ご自分の祖国で、自分自身を生きてみようと思われているそうですね。
玉座に着いたフィリップ王よりも
より偉大な侯爵が静かな壁に囲まれているだなんて！――自由人が！
哲学者が！――あなたに
マドリードがお気に召すかしら。
みんなとても――マドリードでは静かなんですの。

マルキ　ほかのヨーロッパの
すべての地域を補ってあまりあります。

王妃　そのようですね。
わたしはこの世のすべてのもめごとを
思い出せなくなりました。
［エボリ公女に向かって］
エボリ公女よ、あそこに
ヒアシンスが咲いています――あれを
私にとって来てくれませんか。
［公女はその場所に向かう。王妃はいくらか声を落として侯爵に。］
騎士様、私は

11　カタリーナ・フォン・メディチ（一五一九―一五八九）。

考え違いをしているかもしれませんが、それともあなたがいらしたことが
この宮廷で喜んでいる人に、もっと意味があったのですね。

マルキ　悲しんでいる人を一人
私は見つけました。――この世でその人は
ただ何か喜ばしく――

［公女は花を持って戻ってくる。］

エボリ　騎士様は
たくさんの国々を見てこられたのだから、
きっとたくさんの面白いことを
お話ししていただけましょう。

マルキ　もちろんですとも。
冒険を求めることは、ご存知のように
騎士の義務でもあります――すべての中で一番尊い義務は
ご婦人の保護です。

モンデカー　巨人を倒してね！
今はもう巨人はおりませんが。

マルキ　暴力は
弱い人々にはいつでも巨人と同じです。

王妃　騎士様のおっしゃることは正しいわ。巨人はまだいるのに、
騎士がもういないのよ。

マルキ　つい最近
ナポリからの帰り道で、
私は感動的な出来事に立ち会いました。
それは友情が残した聖なる遺産として私のものになったのです。
――もし、
陛下、お話が
わずらわしくなければ、お耳に入れてよろしいでしょうか。

王妃　私が
決めるのね？　公女はとても
知りたがっている様子だわ。要領よくね。
私も物語は好きだわ。

マルキ　ミランドラ[12]に高貴な家が二軒ありました。
妬みと、長年にわたる敵対関係に疲れて果てつつ、
皇帝派のギベリオンと教皇派のゲルフェンに分かれ、
すでに数世紀にわたり引き継がれました両家は
親戚関係を通して、穏やかな絆が
末永く穏やかに結ばれるようにと決心しました。
権勢を誇るピエトロの甥フェルナンドと、
コロナの娘、神のごときマティルデが、
この美しき永遠の絆を結びつけるために
選び出されたのでした。
美しい二人の心は、これまでに自然が
作り出したことがないほどぴったりでした、――世間は
かつてないほど、よい選択だと称えました。

12　北イタリアの小都市。

フェルナンドは愛らしい花嫁を
なおも肖像画によってのみ恋い慕っていました――
どんなにかフェルナンドは震えたでしょうか、
彼は火のように熱く期待していたのに、
肖像画をあえて信じてはいけないと知った時には！
パドゥアに、学業のために
とどまらざるを得なかったのですが、
　　フェルナンドは期待していたのでした、
喜ばしい一瞬だけを、その時彼は
マティルでの足元で
初めての愛の告白を必死に口にすることができるはずだったのです。
［王妃はさらにじっと聞き入っている。マルキは少し沈黙したのち続ける。王妃の御前で許される限りではあるが、話はエボリ公女に向けられている。］
そうこうするうちに、妻の死が
ピエトロの手を自由にしました――若者のような激しい思いで
この老人は噂の声をより合わせました、
それはマティルデへの賞賛につながっていきました。
彼は行ってみました！　見てみました！――恋をしました！
　　新しい心の動きが
自然のかすかな声を押しとどめました、
叔父は甥の花嫁に求婚しました、
そしてその略奪したものを祭壇の前で清めたのです。

王妃　そしてフェルナンドはどのような決心をしたのです？
マルキ　　愛の翼にのって
恐ろしい交換のことなどには気づかず、
陶酔した男はミランドラへ急ぎ向かいました。
星の光に伴われて彼の足の速い馬は
門にたどり着きました――バッカス神を思わせる響きが
次々とにぎやかに彼のもとへと
煌々と明りのともった屋敷から届きました。
彼は恐る恐る階段を震えながら上がりました、そして見たのです、
誰かに悟られることなくにぎやかな婚礼の間で、
客人たちの興奮した酒盛りの中に
ピエトロが座っているのを――天使がその傍らにいます、
フェルナンドが知っているあの天使は、
彼の夢の中でさえこんなに輝かしく現れたことがなかったほどでした。
一瞬だけ彼には自分がかつて所有していたものが見えました、
そして彼が永久に失ったものが見えたのです。
エボリ　不幸なフェルナンド！
王妃　　物語は
終わりなのですか、騎士様？――
おしまいのようですね。
マルキ　　すっかり終わりというわけではありません。
王妃　　フェルナンドはあなたのお友達だなんて
おっしゃるのではないですか？

マルキ　彼より大事な友達はいません。
エボリ　　どうか
お話をお続けになって、騎士様。
マルキ　この話はとても悲しくなるのです――思い出すと
私はまた胸が痛みます。どうか
終わりにさせてください――
［全員沈黙する］
王妃　［エボリ公女のほうに向き直って］
それではそろそろ
私に娘を抱かせてくださいな。――
公女よ、娘を私のところに連れてきて。
［公女は遠ざかる。マルキは背景に姿を現した小姓に合図すると、小姓はすぐに姿を消す。この間、マルキはモンデカー侯爵夫人と何やら熱を込めて話し合う。――王妃は手紙数通を読み、求めるような視線をマルキに向ける。］
あなたは
私たちにマティルデのことを何もおっしゃらないのですか。
ひょっとして
彼女はフェルナンドがどれほど悩んだかを知らないとでも？
マルキ　マティルデの心は誰にもまだ完全に解き明かされていません――
しかし、偉大な魂の持ち主たちは静かに耐えるものです。
王妃　見回していらっしゃいますの？　あなたの目はどなたをお探しなの？
マルキ　考え事をしておりました、
名前を申し上げるわけにはいかない
とある人物が、私がいる場所に
いたとしたらどんなに幸せだろうかと。
王妃　どのような罪のせいで、その方は
そうできないのですか？
マルキ　［勢いよく話しだして］
なんですって？　このことを
私なりに説明させていただいてよろしいでしょうか？――その人は、もし今やって来たら、許していただけるでしょうか？
王妃　［ぎょっとして］
今ですか、マルキ？　今ですか？　どういう意味ですの？
マルキ　その人は希望してもよいものでしょうか――よろしいでしょうか？
王妃　［動揺が増して］　私を驚かせますのね、
マルキ――駄目ですわ――
マルキ　　こちらにその方はすでにいます。

第五場

王妃。カルロス。
マルキ・フォン・ポーザとモンデカー侯爵夫人は背景に下がる。

カルロス　［王妃の前に跪き］
とうとうその人物はこの瞬間に現れました。
そしてカールはこの高貴なる御手に触れさせていただきます！
――
王妃　どんな登場なの――どんなに罪深く
無謀な驚かせ方かしら！　お立ちなさい！
私たちは見つかりますわ。私の宮廷は近くですもの。
カルロス　私は立ち上がりません――ここに私は永遠に跪いていたい。
この場所で魔法にかけられたように横たわっていたい、
ここに根っこを張ったように――
王妃　狂った人ね！
私のやさしさは、あなたをどんなに無謀にしてしまったのかしら？
どうやって？　わかっていますか、王妃であり、
母なのですよ、この
不敵な言葉が向けられているのは？　おわかりですか、
私が――私自身がこうやって不意打ちされて
王様に対して――
カルロス　私が死ななくてはならないということですね！
僕をここから死刑台へと引きずり上げるがいい！
この瞬間は天国に生きていて、
死であがなっても高すぎることはない。
王妃　そしてあなたの王妃は？
カルロス　［立ち上がって］　あぁ神よ！　行きます――
あなたの元を離れることにしましょう。――あなたが求めるから、
そうしなければならないのでしょうか？　お母様！　お母様
ぞっとするほど私をおからかいになるのですね！　ほのめかしてください、
ちらりと見てくださったり、お口から一言でも
私に、留まれなり、消えろなりという命令になります。
どうしろとお望みでしょうか？
この世に何がありえましょうか、
あなたがお望みだとすれば
大急ぎで犠牲を捧げないことが？
王妃　お逃げなさい。
カルロス　おお、神よ！
王妃　これだけです、カール様、どうして私があなたに、
涙ながらに必死でお願いするのかといえば――お逃げなさい――
私の侍女たちが――
私の牢獄の番人たちが、あなたと私が
一緒にいるのを見つける前に、大きな噂が
あなたのお父様のお耳に届く前に――
カルロス　私は期待していました、
私の運命を――生きようが死のうが。
どうやってですって？　私は、自分の望みを
たったこれだけの瞬間にかけましたが、それは
あなたにとうとう立会人なしで会わせてくれたのに、お門違いに

驚かせて、
目的地で幻滅するだけのためでしょうか？
いいえ、王妃様！　世界は百回でも
千回でもぐるぐる回ることができます、
この都合のいい状況が、偶然繰り返される前に。

王妃　こんな偶然は、未来永劫再びあってはなりません。
不幸な人ね！　私に何をお望みなの？

カルロス　おぉ王妃様、私が戦ったことは、
戦ったのです、他の人がこれまでやってこなかったほどに、
神様が証人です――王妃様！　無駄だったのです！
私の英雄的な大胆さは消えました。負けたのです。

王妃　そのことはどうでもいいわ――私の平安のために――

カルロス　あなたは私のものでした――世界に対して
私に二つの立派な王位から約束されていたのです、
天と自然によって、私に認められていたのです、
そしてフィリップが、フィリップが私からあなたを奪った――

王妃　彼はあなたのお父様です。

カルロス　　あなたの夫だ。

王妃　　あなたに
世界一大きな国を継がせる方。

カルロス　そしてあなたを母にした――

王妃　　偉大なる神よ！　あなたは狂っている――

カルロス　あの人は、自分がどれだけ裕福かも知っているのかな。
あの人は
あなたの気持ちを大事にする、感受性の強い心を持っているのかな？
僕は嘆きたくはない、いいや、忘れたいんです、
言葉では言い表せないくらい幸せだったでしょうね、
この僕が彼女と
一緒になれていたとしたら――実際は、あの人がそうなのですが。
あの人はふさわしくない――これは、これは地獄の苦しみだ！
あの人ではないし、今後もそんなことは決してないだろう。
あなたときたら、私から天国を奪ったようなものです、
その天国を
フィリップ王の腕の中で根絶やしにするためにね。

王妃　忌まわしい考えだわ！

カルロス　　あぁ、知っていますよ、
誰がこの結婚の首謀者だったか――お見通しですよ、
フィリップがどうやって恋をしていて、求婚したかということをね。
あなたはこの国でいったい誰なんですか？　聞かせてください。
女性の統治者とか？　絶対に違うな。どうやったらできるのでしょうか、
あなたが統治者である場所で、
　アルバのような奴らが残虐な人殺しをしているなんて？
フランドル人たちが信仰のために血を流したりできたでしょうか？
ねぇ、それともあなたはフィリップの妻なのですか？　できっこ

ない！
そんなの信じられない。妻というものは、
夫の心を得ているものです――で彼の心は誰のものなんですか？
あの人は、睦(むつ)みごとのたびに、
きっと熱に浮かされている間に萎(な)えてしまって、
王笏とあの人の灰色の髪を理由に非礼をわびるのではないですか？

王妃　誰があなたに言ったのですか、フィリップ様の傍での
私の人生がお涙ちょうだいものだなんて？

カルロス　僕の心は
燃えるように感じているのです、僕の傍での人生は
羨望の的だったろうにと。

王妃　自惚れ屋さんね！
もし私の心がそれと反対のことしか言っていなかったとしたら？
もしフィリップ様の恭しいお優しさや
無口な愛の身振りが
高慢な息子の
向こう見ずな雄弁さよりもずっと心がこもっていて感動させてくれていたら？
もし老人の思慮深い敬意が――

カルロス　それはまた別のものですよ――だったら――だったらお許しを。
存じませんでした。――存じておりませんでした、あなたが
王様を愛していらっしゃることを。

王妃　あの方を敬うのが、私の望みであり、喜びなのです。

カルロス　あなたは愛したことがないのですか。

王妃　――私はもう愛しません。

カルロス　それがあなたの心だからですか？　あなたの誓いが禁じているからですか？

王妃　私から離れてください、皇子よ、そして
こんなおしゃべりに二度と来ないでください。

カルロス　それがあなたの誓いだからですか？　それをあなたの心が禁じているからですか？

王妃　私の義務だからです――不幸な人よ、何のために
運命を悲しいほど品評するのですか、
あなたも私も、この運命に従わなくてはならないのに？

カルロス　ならない？
従わなくてはならない？

王妃　なんですって？
改まったものの言い方をして、何をおっしゃりたいの？

カルロス　カルロスが
そうしなくてはならないと思う限りのことを、
やりたい時にするまでです。カルロスが
するつもりはないのは、この国で
一番不幸な者のままでいることです、もしカルロスにとって
不幸者でいることが、
法を覆すことでしかないにしても。

王妃　私は、あなたのことがちゃんとわかっているかしら？

あなたはまだ望んでいらっしゃるの？　まだあえて、希望を持とうとしているの？
すべてを、すべてをすでに失っているというところで？

カルロス　私は死んだ者たちしか諦めていません。

王妃　私を、あなたの母を、手に入れたいのですか？――

［王妃はカルロスを長い間、穴を開けんばかりに見つめる――そして威厳と荘重さをもって。］

駄目なことはありませんわね？　あぁ！　新しく選ばれた王様はそれ以上のことができますもの――去りゆく者の
命令を炎で根絶やしにできますし、
肖像画を打ち壊したり、それどころか――
だれが邪魔したりしましょうか？――死者のミイラは
エスコリアル[13]の墓所から
引きずり出され、日の下にさらされ、
汚された塵は風で四方に飛ばされ、
そして最後に、堂々とやってのけるのです――

カルロス　お願いです、最後まで言わないで下さい。

王妃　最後には母親と結婚するんでしょう。

カルロス　呪われた息子だ！

［彼は一瞬、体をこわばらせ、言葉を失う。］

そうです、終わったんです。今は終わったんです。――はっきり、明瞭にわかりました、何が
僕から永遠に、永遠に闇に包まれたままでなければならないかを。
あなたは、私から去ってしまった――去った――去ったのです
――
永久に！――今になって、投げたものが落ちてきました。
私はあなたを失った――あぁこの思いの中に
地獄がある。地獄とは、他の人が
あなたを所有することなのです。――苦しい！　何が何だか、
神経が八つ裂きにされ始めています。

王妃　嘆かわしく、かけがえのないカルロス様！　私は感じています――
すっかり感じています、言いようのない苦しみを。
これが今、あなたの胸の中で荒れ狂っているのですね。
このままずっとあなたの愛のようにこの苦しみが続くのですね。
このままずっとこの苦しみのように、これに打ち勝つことが名誉
でもあり続けます。
この名誉を勝ち取るのです、若き英雄よ。その対価は
この高貴で、たくましい戦士にふさわしいだけあります、
若者にぴったりです、その心映えによって
多くの高貴な先祖たちの誠実さが押し寄せてくるのです。
頑張ってください、素晴らしい皇子様、カール大帝の
子孫が新たに戦うのです、
ほかの人たちの子どもは、意気地なくやめるというところなのに。

カルロス　遅すぎです！　あぁ、神よ！　遅すぎです！

13　マドリードから北に約四十五キロに位置する。王家の墓所があった。

王妃　　一人前の男に
なるのが？　あぁ、カール様！　私たちの徳は、どんなにか立派
でしょうか、
もし私たちの心が、その試練の最中に砕けてしまったら！
しっかり慎重に行きましょう――もっと慎重に、皇子様、
ほかの兄弟たち百万人よりも。
慎重さというものは、自分のお気に入りには不公平に、
ほかの人たちからとってきたものを与えるのです、
　　そして百万人が問いかけます、
こいつは母親のおなかの中にいる時からもう
ほかの人たちよりも大事にされていなかったか？と。
立ち上がるのです！　天国の正しさを救済するのです！
あなたは世界の先頭に立つためにふさわしくありなさい、
そして誰も犠牲を払わないことに、身を挺するのです。

カルロス　これは私もできますとも。――あなたを勝ち取るためなら、
巨人の力が出ます。あなたを失うなら、無理です。

王妃　白状なさい、カルロス様――反抗心と、
苦しさと誇りなのです、あなたが
こんなに荒れ狂って母親に向けている望みというのは。愛とは、
つまり、あなたが私のために無駄に浪費する心のことですが、
それは国のものなのです。この国を
あなたはいつか統治せねばなりません。
ご覧なさい、あなたは
あなたが面倒を見なくてはいけない人々の財産を浪費しています。
愛とは、あなたの偉大な職責のことです。今までは
間違って母親に向けられていました。――お持ちなさい、
これをあなたの未来の国民にお持ちなさい。
そして感じるのです、良心の咎めの代わりに、
神の喜びであることを。エリーザベトは
あなたの初恋の人でした。二人目の恋人は
スペインなのです。私はとっても喜んで、カール様、
より素敵な恋人を祝福しますわ！

カール　［感情に押されて、彼女の足元にうずくまる］
あなたは何と立派なのだ、あぁ、天国のような人だ！――ええ、
何でも、
あなたが求めることはすべて、喜んでやりましょう。――そうでなくては！
［立ち上がる］
ここに私は全能の神の手の中に立ち、誓います、
あなたにお誓いします、永遠に――
あぁ天よ！　嫌だ！　永遠に沈黙することは誓いますが、
永遠に忘れることはできません。

王妃　　どうして私が
カルロス様に要求できましょうか、私自身が
したくないと思っていることを？

マルキ　［並木道から急いでくる］

王妃　王様だ！
マルキ　神様！
ここから姿を消しましょう、皇子様！　ここを離れて！
王妃　あの方の疑い深い心には
ゾッとするわ。あの方はあなたを見ていますよ――
カルロス　僕はここにいる！
王妃　そしたら誰が犠牲になるのかしら？
カルロス　［マルキの腕を引っ張り］　行こう！　行こう！
来るんだ、ローデリヒ！
［行くが、もう一度戻ってくる］
何を頂いて参ることができますでしょうか？
王妃
あなたの母親の親愛の情を。
カルロス　親愛の情！　母親！
王妃　そしてオランダから届いたこの涙を。
［彼女はカルロスに手紙を数通渡す。カールとマルキは退場する。
王妃は落ち着きなく侍女たちを見回すが、どこにも姿が見えない。
王妃が背景に下がろうとした時、王が現れる。］

第六場

王。王妃。アルバ侯爵。レルマ伯爵。ドミンゴ。その他数名の女官と高官たちは離れたところにとどまったままでいる。

王　［よそよそしく見回し、しばらく沈黙する］
まったくお一人ですか、奥様？
一人の侍女も傍に置いていないのですか？
おかしいですね――あなたの女官たちはどこにいるのです？
王妃　わがお優しき夫――
王　なぜお一人なのか？
［供の者たちに］
この許しがたい仕事ぶりについては
しっかりと釈明していただかないといけませんな。
誰が王妃の宮内官職なのですか？
王妃様にお仕えする係は、今日は誰に当たっているのですか？
王妃　お怒りにならないでくださいまし、わが夫よ――私自身が、
私が当の責任者です――私の命令で
エボリ公女は席を外しています。
王　あなたの命令で？
王妃　侍女を呼びにやったのです。
私が内親王に会いたくなったからです。
王　だから供を立ち去らせたと？

しかしこれは第一侍女の言い訳にしかなりませんね、
第二の侍女はどこにいましたか？
モンデカー　［そうこうするうちに戻ってきており、他の女官たちに交じっていたが、進み出て］
陛下、
私が責任者かと存じます――
王　そういうことなら
十年間の暇をやろう、
マドリードから離れてこのことをよく考えるように。
［侯爵夫人は泣きながら後退する。全員沈黙。周りにいる者たちは全員驚いて王妃を見つめる。］
王妃　ねぇ侯爵夫人、誰を思って悲しんでいるのですか？
［王にむかって。］　私が
間違いをしでかしたというのなら、ねぇ、わがお優しき夫よ、
この国の王妃の冠は、私自身は
何としても手に入れようとしたものではありませんが、私を
少なくとも赤面させるようなことから守ってくれるはずです。
この王国には、
王侯出身の女が裁きを求めるような法律はないのですか？
ただの無理強いだけが、スペインの女たちを監視しているのですか？
その人の誠実さ以上の目撃者が、彼女を保護しているのですか？
さぁ、お許しを、わが夫。――私は
慣れておりません、喜んでわが身に仕えてくれた人を
涙で送ることには。――モンデカー！
［彼女は自分のベルトを外し、それを侯爵夫人に渡す。］
あなたは王様を怒らせてしまったけれど――私は違うわ――
だから私の好意とこの出来事のしるしに
これを受け取ってください。――この国を避けなさい――
あなたはスペインでしか罪を犯していません。
私のフランスでは、そんな涙も
喜びで拭ってもらえることでしょう。――あぁ、これは私を
　永遠に戒めるに違いないわ。
［王妃は侍女長官にもたれかかり、顔を覆う。］
私のフランスなら、こうはならなかったでしょうに。
王　［若干動揺して］　余の愛の非難が
あなたをそんなに悲しませてしまったのか？
一言が悲しませたのか、とてもやさしく心配して
余の口から出てきただけなのに？
［重臣たちに向かって］
ここにわが王位の家臣たちがいる！
わが眼（まなこ）を眠りが襲うたびに
余は毎晩、夜になると
数えたくなるのだ、わが国民の心臓がどれだけ
わが遥かなる天空のかなたで鼓動しているのかということを――
余は自分の王位について
わが心の妻に対するよりも不安におののいたりするはずがあろうか？――

わが国民のためには、余の剣が備わっている、
そして、――アルバ侯爵よ、この目はただ
余の妻の愛のためにあるのだ。

王妃　　もし私があなたを
侮辱したのなら、わが夫よ――

王　　余は
キリスト教世界で最も豊かな男と名乗っている。
太陽はわが国では沈むことがない――
しかしこれらすべてを他の人間がすでに所有していたし、
余の後には、ほかのみんながまだ所有していくことになるだろう。
いまは余のものだ。王が所有しているものは
幸いである――エリーザベトはフィリップのものなのだ。
ここが余の死すべき場所なのだ。

王妃　恐れていらっしゃるのですか、陛下？

王　　この灰色の髪が恐れていないとでも？
余はいったん恐れることを始めたら、
恐れることをやめてしまう――

［廷臣たちに向かって］　余は自分の宮廷の
規模を推し量っているが――第一の者がいないな。
我が皇太子、ドン・カルロスはどこなのだ。

［誰も答えない。］

あの小僧が、
ドン・カルロスが怖くなってきた。
アルカラの大学から戻って来たからというもの、
あいつは、余がいるところを避けている。
あいつの血は熱いのに、なぜ視線はあんなに冷たいのだ？
あいつの振る舞いは、あんなにも杓子定規に厳かなのだ？
気をつけなさい。皆にはそのように勧めておこう。

アルバ　　私めでございます。
この胸に心臓が鼓動する限り、
ドン・フィリップ様はぐっすりとお休みくださいますよう。
天国の前に立つ神のケルビムの如く、
アルバ公爵は玉座の前におります。

レルマ　　お言葉ではありますが、
賢明なる王様に、不遜にも
反論してもよろしいでしょうか？――あまりにも深く
王様の権威を敬っておりますので、
その息子君（ぎみ）を、早急に厳格に判断することができません。
私は、カルロス様の熱い血を恐れてはおりますが、
あの方のお心については何も恐れておりません。

王　　レルマ伯爵よ、
お前は父の心に良い思いを抱かせるように話をした。
公爵は王の支えとなるであろう。――
この件は以上だ――

［王は向き直り、お付きの者たちに］

さぁ、マドリードへ急ぎ参ろう。
王の公務が余を呼んでいる。
異端の疫病が、わが国民に広がっている。

反乱は、わがオランダ諸州で広がっている。
盛り上がりを見せている。
ぞっとするような見せしめが、迷った者たちを改心させなくてはならない。
すべてのキリスト教徒の王たちが誓った
偉大なる誓いを、私は実行するつもりだ。
この重罪法廷には例外が認められない。
わが宮廷全員が、厳かに列席してもらいたい。
［王は王妃を先導し、他の者たちも従う。］

第七場

ドン・カルロスは手紙数通を手にしている。マルキ・フォン・ポーザが反対側からやって来る。

カルロス　僕は決めたよ。フランドルを助けなくちゃ。
あの方もそう望まれている。──僕にはそれで十分さ。
マルキ　もうこれで
一刻たりとも無駄にできない。
噂では、アルバ公爵は、官房で
もう総督に任命されたって。
カルロス　すぐに明日、
僕はお父様に謁見をお願いしよう。
この職を僕にと、お願いするんだ。これは
お父様にする初めてのお願いだよ。
あの人は、僕にそれを拒めないさ。もう長い間
あの人は僕と、マドリードで会いたくないのだから。
僕を遠ざけておけるなんて、なんていい言い訳じゃないか。
それに ── 君に言うべきかな、ローデリヒ？
僕はもっと多くを望んでいるんだ ── ひょっとしたら、
僕らは顔と顔を突き合わせて、
また僕に好意を示してくれるかもしれない。
あの人は、まだ自然の声を聞いたことが
まったくないんだ ── やらせてみてくれ、ローデリヒ、
僕の口に上るお願いならできるさ。
マルキ　やっと私のカルロス様が、再び話をしているのが聞こえました。
やっとまた、すっかりあなたらしくなられた。

第八場

先ほどの登場人物。レルマ伯爵。

レルマ　ちょうど今、

陛下がアランフェスをお立ちになられた。
私への命令は――
カルロス　　もうわかったよ、レルマ伯爵、
僕は王様とご一緒に到着しよう。
マルキ　［退出するという仕草をして。いくらか形式張っている］
そのほかには
殿下は私に、ご命令はございませんか。
カルロス　無いよ、騎士殿。どうぞご無事で
マドリードにお着き下さい。あなたには
もっとたくさんフランドルの話をしてもらいたい。
［まだ待機していたレルマに向かって］
すぐに追いかけるよ。
［レルマ退場］

第九場

ドン・カルロス。マルキ。

カルロス　　君のしたことがわかったよ。
ありがとう。でもこの無理強いは、
第三者がいる時だけにしよう。僕らは
兄弟じゃないか？――身分というこの茶番劇は、
もうこれからは、僕らの絆から追い出してしまおう！
君と考えてみたいんだ、僕らが二人とも
舞踏会に、仮面をつけて現れたとしたらどうだろう、
君は奴隷の服を着ていて、僕は気まぐれにも
高貴なる緋色に包まれているんだ。
謝肉祭が続く限り、僕らはこの嘘を敬おうよ、
役柄に誠実に、噴き出さんばかりの真面目さでもって、
みんなが甘くうっとりしているところを、邪魔することもなくね。
でも、この仮面を通して、君のカールは君に合図するんだ、
君は通り際に、両手を押し付けてくれたらいい、
それで分かり合えるよ。
マルキ　　夢は神々しいものです。
でもこれは、決して消え去ったりしませんか？　私のカール様は
際限の無い権威にあらがう魅力を
お判りいただいていますか？
偉大な日が元に戻ってしまう――つまり――
ご忠告させていただきたいのですが――英雄的な心情が
ただの重々しい試験運用に帰してしまうこともあります。
ドン・フィリップ様はお亡くなりになります。
カール様は、キリスト教徒たちの中で一番大きな国を
お継ぎになるのです。――恐ろしい亀裂が
いつか死すべき定めの人間たちと、その方を割いてしまうのです、
そしてその日に、昨日まで人間だったものが神になるのです。
そうなると、その方にはもう弱点などありません。

永遠の義務が、その方の口を黙らせます。人間らしさは
――まだ今日のうちは、彼の耳には
立派な言葉に聞こえますが――
身売りしてしまって、偶像の周りをのたうち回るでしょう。
同情心は、悩みと一緒に消え失せ、
快楽の中で、誠実な心持は消耗してしまうのです、
彼の愚かさゆえに、ペルーからは黄金が送られてきます、
彼の悪徳ゆえに、その宮廷は悪魔をおびき寄せるのです。
その方はうっとりとして、この天国で眠りにつくことでしょう、
その天国なんて、奴隷たちが狡猾に、彼の周りに築いたものですが。
彼の夢が続く限り、その神々しさは守られます。――嘆かわしいのは、
同情のあまり、その人をゆすり起そうとする、狂気の者です。
しかしローデリヒはどうなるでしょうか？――友情は
真実であり、大胆なものです。――病んだ陛下は、
その恐ろしい光線に辛抱することはできないでしょう。
市民たちの反抗に、あなたは耐えることはできないことでしょう、
私は王の尊大さに耐えられません。

カルロス　鋭いし、ぞっとするね、
君の王侯の描写ときたら。そうだね、
君を信じるよ――でも、快楽だけが
罪に対して心を許しているんだ。――僕は
まだ純粋な、一人の二十三歳の若者なんだ。
僕の前で、何千人もが、破廉恥にも
やりたい放題に抱きあおうとも、
精神の最高の部分、つまり男らしさは
僕は将来の支配者のために取り分けておいているんだ。
女でもないのに、
僕の胸の内の何が、君にあふれ出ていくというのだい？

マルキ　それは私の方ですよ、私は
そんなに心を込めてあなたを愛せるでしょうか、カール様、もし
あなたを恐れなくてはならないとしたら？

カルロス　そんなことは絶対に起こらないよ。
君は僕が必要なのかい？　君は
王位からたっぷりと物乞いしたいのか？　黄金に魅了されているのか？
君は僕よりも、お金持ちの家臣だ、
いつか王になる僕よりもね。――君は
名誉欲に燃えているのか？　すでに若くして君は
自分の割り当て分を使い果たしてしまったね――君は、
名誉を拒絶してしまったんだ。
僕たちのうちのどちらかが、もう一人の債権者になるんだ、
そして負債を負うのはどちらだろう？――黙っているね、
これを試してみることが怖いのかい？　自分自身に
自信が持てないのかい？

マルキ　よし、わかりました、お誓いしましょう。
さぁ、私の手を。

カルロス　では僕の手を？

マルキ　永遠に、
そしてこの言葉の最も強い意味において。

カルロス　こんなに誠実で、あたたかく、今日は皇太子に、
そしていつの日かの王に好意を示してくれるのかい？

マルキ　あなたにお誓いいたします。

カルロス　では、もしご機嫌取りの虫が
僕の不用心な心を
蝕んだとしたら、――もしこの目が
昔は泣いたというのに、涙を忘れていたら、――この耳が
嘆願する声に閉ざされていたとしたら、君は
僕の誠実さを、恐れることなく擁護する者でいてくれるのだね、
僕を元気づけて、僕の守護霊を
その偉大な名で呼んでくれるのだね。

マルキ　そうです。

カルロス　ではもう一つお願いがあるんだ！　僕を気軽に「君」と
呼んでくれ。
僕は、君たちの仲間をいつもうらやましく思っていたんだ、
親しさを優先させることができるから。
この兄弟みたいな「君」という呼び方だと、僕の耳や
心は、平等になれたという甘い予感でだまされてしまう。
――とがめないでくれ。――君が言おうとしたことを、当ててみよう。
君には大したことじゃない、わかってるよ、――でも僕には、
王様の息子には、たくさんのことなんだ。
僕の兄弟になってくれるかい？

マルキ　君の兄弟！

カルロス　さぁ、王様のところへ、
もう恐れるものは何もない――君と腕を組んで、
僕の時代に戦いを挑もう。

第一幕終わり、第二幕に続く